

令和 2 年度 西条市の教育に関するアンケート調査 総まとめ（抜粋）

（1）小学校や中学校がどのようなところであるべきか

小学 6 年生保護者、小学校教員、市民の結果から、小学校は「子どもが基礎的な学力を身に付けるところ」であり、かつ「子どもが多様な考えに触れ、資質や能力を伸ばしていくところ」だという意見で一致しました。どちらかといえば、保護者や市民（特に年齢の高い方）が小学校に対して子どもの基礎学力向上を求める傾向がありますが、保護者、小学校教員、市民が概ね小学校のあり方に対して同じ考え方を有していると受け止めることができます。

また、中学 3 年生保護者、中学校教員の結果から、中学校も小学校と同様に「子どもが基礎的な学力を身に付けるところ」であり、かつ「子どもが多様な考えに触れ、資質や能力を伸ばしていくところ」だという意見で一致しました。しかしながら、こちらは保護者が中学校に対して子どもの基礎学力向上を強く求める傾向がみられることから、子どもの基礎学力向上と同程度に子どもの資質や能力を伸ばしたいと考えている教員（特に若い教員は基礎学力の向上よりも子どもの資質や能力向上を重視する傾向にある）との間に考え方の違いが生じているのではないかと受け止めることができます。

（2）小学校や中学校で身に付けることが大切だと思う能力や態度

小学 6 年生保護者、小学校教員、市民の結果から、小学校では「自ら学び、考え、主体的に行動する力」を身に付けることが最も大切であり、かつ「教科の基礎学力」を身に付けることが大切だという意見で一致しました。どちらかといえば、保護者が教員や市民よりも「教科の基礎学力」を身に付けることが大切だと考えている傾向がみられます。

また、中学 3 年生保護者、中学校教員の結果から、中学校においても小学校と同様に、「自ら学び、考え、主体的に行動する力」を身に付けることが最も大切であり、かつ「教科の基礎学力」を身に付けることが大切だという意見で一致しました。保護者と教員の傾向が概ね一致していることから、教員と保護者の双方が、子どもの基礎学力の習得が大切だと考えているとはいえ、子どもが自ら学び考える力を身に付けることが最優先だと考えていると受け止めることができます。

一方で、小学校教員と中学校教員の結果から、小学校教員は年齢によって大切だと思う能力や態度に関する考え方の違いがみられなかった一方で、中学校教員は年齢によって考え方に大きな違いがみられたことが特徴です。また、所属する中学校の地区別にも考え方に違いがみられましたが、保護者の考え方も地区によって異なるため、教員と保護者の考え方が一致している状況から問題ないと受け止めることができます。

(3) 大切だと思える能力や態度を育むために今後力を入れるべき施策

小学6年生保護者、小学校教員、市民の結果から、優先順位に違いがあるものの、小学校では教員の資質向上に力を入れるべきということで意見が一致しました。また、保護者はICT教育の更なる推進に力を入れるべきと考え、市民は道徳教育に力を入れるべきと考える一方で、教員は教員自身の事務量軽減によって子どもと向き合う時間を確保するべきと考えていることから、教育現場が求められる理想と教員の事務量過多という現実とのギャップが大きいのではないかと受け止めることができます。

また、中学3年生保護者、中学校教員の結果から、優先順位に違いがあるものの、中学校においても教員の資質向上に力を入れるべきということで意見が一致しました。また、小学校と同様に、保護者はICT教育の更なる推進に力を入れるべきと考える一方で、教員は教員自身の事務量軽減によって子どもと向き合う時間を確保するべきと考えており、教育現場が求められる理想と教員の事務量過多という現実とのギャップが大きいのではないかと受け止めることができます。

一方で、小学校教員と異なり、中学校教員では年齢の高い教員を中心に、教員の資質向上に力を入れるべきという考え方が多くみられ、特に規模の大きい中学校（または規模の大きい中学校が集中する西条地区）でその傾向が強くみられます。(1)(2)の結果からも、中学校教員は年齢によって考え方に大きな違いがみられたことから、何が要因となって考え方の違いが生じているのか、なぜ年齢の高い教員を中心に資質向上に力を入れなければならないと考えているのか、西条市の公立中学校は何を目指すべきなのかを統合的に議論していく必要があるのではないかと受け止めることができます。

(4) 小学校や中学校の学習環境を考える上で重視すべきもの

小学6年生保護者、小学校教員、市民の結果から、小学校では「学校の教員の人数や質が充実し児童一人ひとりに行き届いた教育が受けられる」環境を重視すべきだという意見で一致しました。また、優先順位に違いがあるものの、「集団の中でコミュニケーション能力を身に付けやすい」「クラス内の仲間意識が生まれやすい」と子どもが集団の中から学ぶことができる環境を重視する意見についても概ね一致しましたので、保護者、小学校教員、市民が概ね小学校の学習環境のあり方に対して同じ考え方を有していると受け止めることができます。

また、中学3年生保護者、中学校教員の結果から、中学校においても「学校の教員の人数や質が充実し児童一人ひとりに行き届いた教育が受けられる」環境を重視すべきだという意見で一致しましたが、小学校の場合と異なり、特に保護者よりも教員側が人数や質の充実を強く意識している傾向がみられます。年齢別にみても、40歳以上の中学校教員の8割近くが「学校の教員の人数や質が充実し児童一人ひとりに行き届いた教育が受けられる」環境が重要と選択しており、小学校教員と比較しても顕著に傾向がみられます。(1)(2)(3)の結果もふまえ、何が要因となっているのか、なぜ40歳以上の教員が特に教員の質や人数の

充実を求めているのかを検証する必要があるのではないかと受け止めることができます。

(5) 未来の小学校や中学校にお子様を通う場合の考え方

(教員に対する質問は、教育環境として望ましいと思う小学校や中学校の規模)

小学6年生保護者、小学校教員、市民の結果から、保護者や市民は「児童数が少なくても、複式学級になるまでは1学年1学級の小学校に通わせたい」という考える一方で、教員は1学年2学級または3学級が教育環境として望ましいと考える結果となりました。特に、規模の小さい小学校の保護者や年齢の高い市民が「児童数が少なくても、複式学級になるまでは1学年1学級の小学校に通わせたい」という意向を強く有する一方で、ともに「複式学級に通わせたい」と回答した比率は低くなる傾向がみられます。これらの傾向から、本市の小学校においては、少なくとも将来的に複式学級になることが現実味を帯びてきた段階において、子どもに最適な教育環境を提供するためには何が必要なのかという議論を本格的に進める必要があると受け止めることができます。

また、中学3年生保護者、中学校教員の結果から、保護者は1学年3学級または2学級の中学校に通わせたいと考える一方で、教員は1学年3学級または4学級が教育環境として望ましいと考える結果となりました。特に、現時点で規模の小さい中学校の保護者の半数以上が1学年2学級の中学校に通わせたいと回答する一方で、同じく現時点で規模の小さい中学校の教員の半数以上が1学年3学級の中学校が教育環境として望ましいとの考えを有している傾向がみられます。これらの小規模な中学校は、すでに1学年2学級以下の状況にあり、かつ将来的に1学年1学級以下になることが想定される中学校も存在していることから、中学校においても、子どもに最適な教育環境を提供するためには何が必要なのかという検討を進めていく必要があると受け止めることができます。